

1950年代におけるアラカン人仏教徒議員の 新州設立要求

齋 藤 瑞 枝*

A Request for Establishment of an Arakan State Made by Arakanese Buddhist MP in the 1950s

Mizue SARO*

The purpose of this paper is to examine U Kyaw Min's speech in the Burmese Parliament on 12 March 1957 and the political situation in which it was received. There were several movements in the name of Arakan, and most of them were fought by local guerrillas. The reason why U Kyaw Min's speech is worth considering is that he requested a State for the Arakan in the Burmese Parliament. He regarded himself as representing the majority of the Arakan, and demanded that the AFPFL Government to make effort to gain the confidence of the Arakanese. In fact, U Kyaw Min was a politician who used the Arakanese position in seeking power in the Burmese Politics. But his speech does reflect the political situation of Burma. Since the independence of the Union of Burma, not much attention was paid to the people and regions in the modern history of Burma, which were distant from the politics of the central Burma. U Kyaw Min's speech allows us to reconsider the distance, shown after nine years of independence of the Union of Burma and a year before the first Army takeover.

I 序 論

I-1 チョーミンへの着目

アラカン地方はアラカン山脈の西側でベンガル地方東南部と接する地域である。¹⁾

* 東京大学大学院人文社会系研究科；Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

- 1) 現在のところアラカン地方についての明確な規定はない。本論ではあえて植民地化以後のビルマ国内での規定に従うとするラカイン州の州境ではなく、地域としてのつながりを表すアラカン地方を考える。旧アラカン王国は現在のバングラデシュの主要港チッタゴンまで広がっていて、現在に至るまでチッタゴン南部にはアラカン語を話す人たちが住んでおり「密輸」などで経済的にも人的にも交流が行われているからである。なおアラカンもラカインも語源は同じと考えられるが、アラカンという単語はおそらくベンガル地方を経由して英語に入ったと考えられ、ラカインはビルマ語及びビルマ文字のスペルをアラカン語読みしたものである。本論でアラカンという語を主に用いるのは、英語文献は1990年代になってから出版されたもの以外にラカインを用いるものが殆ど見あたらないこと、及び少なくとも1990年代において仏教徒のアラカン人は自分たちのことをラカインというものの、ムスリムの中にはラカインという規定には自分たちが含まれていないが、まだアラカンという単語には自分た

本論は、アラカン地方出身のチョーミン (U Kyaw Min)²⁾ が、1957年3月12日のビルマ議会において行った演説を通して、1950年代のビルマの政治状況におけるアラカン州設立要求の意味を考察するものである。

チョーミンは1899年11月15日にアキャブ（現在のラカイン州の州都シットウェ。アラカン読みではサイットウェ）に生まれた政治家である。父のトゥンチャン (U Htoon Chan) は地主で弁護士だった。チョーミンは1921年にケンブリッジ大学の学士号を取得、1922年にインド高等文官 (Indian Civil Service; ICS) に、採用された。英国本国での英国人と共に受けた試験に合格して採用された唯一の英領ビルマ出身者であった。英領植民地のネイティヴとしては、成功した部類と考えられる。

1948年の独立以後、ビルマ連邦ではシャン州やカチン州などの州が設置されていた。これらの州は1947年に制定された憲法によって「理論的には連邦制だが、実質的には単一政府制」と評されるものであったにせよ、州議会や州首相兼大臣をもつ「州 (state)」政府を導入したものであった³⁾ という [Tinker 1959; 浦野・西 1980]。しかしながら本論が扱う1950年代のアラカン地方は、ビルマ本土の一管区とされていた。これはアラカン人がモン人の場合と同様に、ビルマ人⁴⁾ との差異が少なく、アラカン語はビルマ語の一方言に過ぎないと考えられたからである。1974年に、ビルマ領内とされる部分のアラカン地方には、当時のビルマ中央政府の政治的

↘ ちが含まれていると感じる傾向があるからである。(たとえば Mohammed Yunus [1994] は、ラカインをアラカン人仏教徒とし、アラカン人ムスリムをロヒンジャと規定する。また彼はアラカン人仏教徒はモンゴロイド系で、アラカン人ムスリムはアーリア系と設定しているので、彼のいうアラカン人とは人種概念を越えたアラカンに生まれ住んできた者という意味合いがあるのかもしれない。)

なお本論ではロヒンジャの問題まで触れることは出来なかった。ロヒンジャと自己を同一視しないムスリムもいることのみ指摘して、今後の課題としたい。

ちなみに1956年当時のアラカン管区の人口はフェアバーンによれば、19,860,000人の全ビルマに対して、887,500人であったという [Fairbairn 1957]。ただし英国公文書館 (Public Record Office; PRO) 所蔵文書によれば約130万人と推定されている [FO371-143862, DB1016/4 May 1959]。

2) アラカン人は植民地期に官僚として、比較的高い評価を得ていた。これは Donnison [1953] などの植民地期の行政に触れた本における言及の多さや、本論で主な資料としている FO 文書の中での指摘 (たとえば [FO371-75660, 23890 Jan. 3, 1949: 11]。ここでは「アラカン人は一般にビルマのスコットランド人と呼ばれ、戦前には小規模ではあるが強力で影響力のあるアラカン人の貴族階級があった。彼らはビルマの最も優秀な政治家と官僚の多くを産み、ビルマ出身でビジネスに成功した数少ない人々の殆どを占めた」とされる) によって分かる。

こうした中でチョーミンの3人の兄弟は、植民地期に「アラカン兄弟」としてかなりの活躍をした存在である。兄のトゥンアウンヂョオ卿 (Sir Htoon Aung Gyaw) はアキャブ、カルカッタ、ケンブリッジで教育を受け、植民地期最後の蔵相であった。もう1人の兄チョーター (U Kyaw Tha) はラングーン港の弁務官 (Commissioner) であった。以上の記述は主に People's Literature Committee and House [1961] に基づいている。チョーターは FO 文書では1900年頃に生まれたとある [FO371-143857, DB1012/1 Aug. 20, 1959]。

なおチョーミンの父トゥンチャンにもアラカンとしての主張を示す傾向があった。著作として Htoon Chan [1905] がある。彼が弁護士として活動したのはカルカッタと低地ビルマだったようである。

3) この憲法は1962年3月のクーデターの際に停止される。

4) 狭義のビルマ人, Burman を指す。注記 (用語について554ページ) を参照のこと。

判断に基づいて、アラカン州⁵⁾が設置された。本論で扱う演説においてチョーミンが想定しているのは、現在ある形式的な州ではなく外交・軍事といった分野のみを中央政府にまかせる、大きな権限をもった州であった。

1948年のビルマ連邦成立以来、アラカンの分離独立や自治を要求する主張や運動は数多く存在した。これらの運動の中でチョーミンが、ビルマ議会において行ったアラカン地方自治の主張は、ビルマ連邦内のアラカン州設立要求として重要な意味をもつ。なぜならその議論は、1974年に中央政治の一環としての州設立に帰結するからである。本論ではチョーミンの演説の分析を通して、彼の主張の意味を考察し、かつビルマ中央政界における一地方の位置づけがなされていく過程を検討する。

I-2 アラカンの地理的歴史的背景

まずアラカン地方について概説する。アラカン地方には1784-85年に初めてビルマのコンバウン朝の支配下に入るまで独立王国があり、ビルマ本土の諸王朝と並立していた。⁶⁾そしてコンバウン朝による征服の約40年後の1824-26年には、第一次英緬戦争の結果として、アラカンはテナセリウムと共に英領植民地となった。現在のビルマのほぼ全域（シャン地方を除く）が英領となった第三次英緬戦争の約60年前である。英領に組み込まれた際、アラカン管区は当初ベンガル管区の行政システムの中に入った。同時に英領化したテナセリウムが総督の直接の管轄下に組み込まれたのと比較すると、アラカンはベンガルの延長として英国側に認識されていたと考えられる。1862年に英国がアラカン、テナセリウム、及び下ビルマのペグーを併合して英領ビルマ州（Province of British Burma）という一州を形成した際に、各々の弁務官（Commissioner）の上に立つ弁務長官（Chief Commissioner）をラングーンに置いた [Donnison 1953: 16-17]。この時アラカンは初めてラングーンを中心とする英領ビルマの領域に入った。しかし1931年の時点でもなおアラカンの人口の5分の1がインド人あるいはインド人との混血だったという。アラカンでは「英国統治下の116年に亘って、2つのコミュニティはさほどの事件もなく混じり合っていた（intermingled）。潜在的な敵対意識（latent hostility）が、時折燃え上がったりはした」 [FO371-75660, 23890, F213 Mar. 1949] とのことである。それでもアラカンがビルマの中の州として位置づけられたのは、コンバウン朝の軍事的征服と英領植民地期の政治的処置の結果である。このように、アラカンを政治的にビルマの内部の存在と考えることは、必ずしも自

5) 1974年にビルマ連邦の一州としてアラカン地方に設立された州はラカイン州（Rakhine State）と呼ばれる。ビルマ語読みでヤカイン州（Yakhine State）と呼ぶこともある。1962年にネーウイングクーデターを起こして以降の州は一般に、それ以前の州に比べて権限が形骸化されてしまったとされる。

6) アラカン王国については諸説がある。最初がDhannyawaddy時代で、その後7-8世紀頃にはVesali時代になり、Lemro/Laungrett時代があった後に15世紀にはMrauk-U時代となるとするのが一般的である。このMrauk-U朝は17世紀初めに最盛期を迎えた。

明とはいえない。

現在のビルマ研究ではビルマ人を中心としたビルマ（ミャンマー）連邦が、既定の存在として議論される。しかし国家としてのビルマは20世紀に入ってから観念として形成された、歴史的存在である。本論で扱う1950年代のビルマは国家として成立する過程にあった。この中でビルマの歴史的相対性を克服するために、かつての諸王朝、特に領域的に最も拡張したコンバウン朝との連続性が意図的に強調された。従って、ビルマ人以外の民族や、コンバウン朝の直接の支配下に殆ど入らなかった地域は、中心民族としてのビルマ人に対する少数民族、あるいはコンバウン朝の辺境としてのみ捉えられる。彼らの異議申し立ては、ビルマ政府に対する不協和音、国家の領域内に混じった異質性としてのみ論じられた。国家としてのビルマを乱すものとして否定された言説の価値は、未だ評価されていない。しかしそれらの言説の中には、背景とする地方の状況、時代、その後につながる地方と中央の位置づけを模索する動きがあったと考えられる。

I-3 1950年代の政治状況におけるチョーミンの位置づけ

チョーミンが中心となって1952年頃に結成された ANUO（アラカン民族統一組織；Arakan National United Organization）⁷⁾ は1957年までに、連邦としてのビルマの中でアラカンの地方自治（regional autonomy）を強く求め始めていた。この議論が典型的に表現されているのが、本論で分析する1957年3月12日のビルマ議会におけるチョーミンの演説⁸⁾ である。この時のチョーミンの政治的立場は以下のように評価される。

①ビルマとしての独立以後に、アラカンという空間認識の下に主張を行った人物である。チョーミンはアラカン人としての自負は強かった。しかし国家としてのビルマの独立以前においてはチョーミン自身が植民地官僚だったこともあり、「ビルマ」ナショナリズム運動を否定してまでアラカンという空間認識の下に主張を行うことはなかった。あえてアラカンの名の下に主張を行うようになったのは、むしろビルマが独立を達成した後の1950年代のことである。ビルマの独立直前の1945年にも彼は『我らの愛するビルマ』と題した著作を出版している [Kyaw Min, U 1945]⁹⁾。このチョーミンの姿勢の転換には、独立達成後のアラカンとビルマと

7) ANUO はチョーミンが中心となって1952年に結成した、無所属アラカン人議員集団（Independent Arakanese Parliamentary Group; IAPG）を前身とする [Fairbairn 1957]。ただし ANUO の成立時期は明確でなく、Becka [1995] には1951年とある。

8) この演説の原稿と、それに対する英国の担当官のコメントは英国公文書館に記録が残されている [FO371-129403, B1015/28 May 10, 1957]。なおチョーミンの原稿が最初に一般に公開されたのは、本文に記した通り *Nation* [July 15, 1957] においてである。

9) 植民地期には、高級官僚のチョーミンにアラカン人としての自負はあったにせよ、アラカンとしての独立は唱えた記録はない。どちらかというところ、この1957年の演説には、1930年代に英領インドの一州の立場から英領ビルマを分離させる際の論理を再利用した観がある。

1952年にチョーミンが中心となって結成した無所属アラカン人議員集団（IAPG）は、「[与党の一

の位置づけの変化が反映されている。「ビルマ」ナショナリストの文脈で言えば、チョーミンは植民地支配体制に寄生する地方の大地主であり、徐々にであれ否定されるべき存在であった。このためビルマという国家の形成に重点をおいた従来の研究では、チョーミンがアラカンという空間認識の下に行った政治的主張によって当時のビルマ政治に対して投げかけていた問いが十分に考察されてこなかった。

②チョーミンはあくまでもビルマ議会の中で、アラカンを代表する者として政治的主張を行った人物である。1930年代後半から50年代にかけて、アラカンという空間認識に基づく主張を行った諸集団¹⁰⁾があり、国家としてのビルマを殆ど考慮することなく、アラカン地方の一部における自分たちの実際的な立場の正統性を唱えていた。チョーミンの場合、その主張はビルマの議会において、ビルマ連邦内の一州を求めるために行われた。ビルマを介在しないアラカンと考えた者にとっては妥協しすぎた考え方ではあるが、一方で当時の英国大使（旧宗主国の大使）によって一定の評価を受けるものであった。この点については本論Ⅲ-2で考察する。

③チョーミンはまた、ジャーナリズムとの関わりの強い人物である。1950年代のビルマ国内で最もリベラルな英字紙とされた『ネーション』¹¹⁾の経営者の一人でもあり、国家としてのビル

↘[引用者] 反ファシスト人民自由連盟 (Anti Fascist People's Freedom League; AFPFL) その他のいかなる集団に対しても反対するものではない」が「アラカン人のために協力して働く」という宣言を行っていた。アラカン人議員なら誰でも参加資格があったが、ムスリムの議員は当初から AFPFL との繋がりを優先した。この IAPG が後に、アラカン民族統一組織 (Arakan National United Organization; ANUO) となる。

チョーミンに限らず、植民地ビルマの政界で活躍していたアラカン人はむしろ、英国との協調を目指す立場についた者も多い。代表的な人物の名前を二人挙げると、1942年の植民地期最後の首相ポートゥン卿 (Sir Paw Tun) や、注2) で触れた植民地期最後の蔵相でチョーミンの兄のトゥンアウンヂョオ卿 (Sir Htoon Aung Gyaw) などがある [FO371-83104. 1950]。ビルマ独立後にタキン党系のビルマ人ナショナリストを中心として描かれた歴史においては「英国の手先」という否定的な評価を受けているが、こうした英国との親和性は1920年にラングーンで結成された初期のビルマ・ナショナリスト集団である、ビルマ人団体総評議会 (General Council of Burmese Associations; GCBA) にも顕著であり、アラカン人でこの会に属していた者もいる。

これらの人物は通常、ビルマ史の中でビルマ人として扱われている。そしてアラカン人としてよりも、独立後の主体となった世代よりも前の古い世代のビルマ人として扱われる。たとえば根本 [1995] を参照。チョーミンは活動の中心をビルマ議会に置いていたし、あくまでもビルマの代表として行動した傾向がある。本論では、そのチョーミンが、改めてアラカンとしての主張を行った意味を検討している。

10) この諸集団に関しては修士論文をまとめた形で、1997年6月7日の東南アジア史学会で「狭間と近代領域国家——1950年代のアラカンの地域主義」として発表した。なお1929年にはアラカンの歴史に関心を抱くラングーン在住アラカン人が中心となって雑誌 [Arakan Historical Research Society 1929] が出版された。アラカンの名を冠した政治組織は1930年代半ば以降に出現する。

11) チョーミンが経営者の一人である *Nation* 紙は、ビルマが独立した1948年に、編集者を務めることになる華人系ビルマ人でクリスチャンの U Law Yone と共に創刊した。その政府与野党にも反体制派にも厳しい姿勢は、1957年にビルマの独立達成9年を迎えた際に「政治指導者たちは権力に留まるのに、反対する者は堅固に自己防衛した政府を追い出すのに忙しすぎた」という辛口の評を載せたことにも読みとれる [*Nation*, Jan. 7, 1957]。そして「このように報道の自由が維持されて知識人が思いを気軽に表明し続けられれば、長期的に見てビルマに良い結果をもたらすであろう」と英国大使館の記録にコメントされている [FO371-129403, DB1015/4 Jan. 14, 1957]。

マの中で、ある程度広く自らの主張を伝え得る立場にあった。この演説以前でも同紙は野党寄りの立場を明らかにしており、かつチョーミンと彼に関わる活動が大きく掲載されていた。本論で扱う議会での演説は出版禁止となったが、チョーミンは逆手にとり翌日3月13日の『ネーション』紙において演説の長さ分の行をあげ、議長の命令によって報道規制を受けたとの通知のみを掲載した。この白紙の部分を残すやり方は人々の注目を集めた [FO371-129403, DB1015/15 Mar. 25, 1957] とされる。演説の内容を「アラカン州 (The Arakan State)」という題で同紙が報道するのは、約4カ月後の7月15日である。

II チョーミンの演説より

II-1 演説の概要

この演説自体は、戦前からの大物政治家の一人であるエーマウン博士 (Dr. E Maung) が出した内閣不信任に賛同して行われた。¹²⁾ この時期ビルマ議会では、独立以来一貫して与党だった反ファシスト人民自由連盟 (Anti Fascist People's Freedom League; AFPFL) が分裂していた。1956年6月に党再建のために一旦首相を辞任していたウーヌが、この1957年3月2日に首相に復帰した。ウーヌの復帰は2派に分かれていた AFPFL の対立を決定的にしたという。¹³⁾ チョーミンのビルマ議会におけるアラカン人としての主張は、この政争の機会をとらえて政府批判という形で行われたのである。

チョーミン自身は問題を3点に整理し、①英国が去って以来のアラカンの受けてきた行政上の問題。②アラカン州を求めるアラカン人に対する政府の態度の問題。③1956年総選挙の際にアラカンの置かれた状況の問題を挙げている。彼は、その3点のいずれもビルマの政府に正しく理解されたことがないとしている。

しかし同紙は1964年5月に廃刊に追い込まれる。廃刊時の英国大使館の報告者によると、同紙はビルマで最もリベラルであり、影響力も強く、反共運動の先頭にも立っていた。「廃刊は民主的な生活の仕方及び原則のためには、大きな損失である」とも書かれている。新聞としては反英米の色彩があったが、英米からの個々人に対しては友好的であったという [FO371-175140, DB1671/1 May 27, 1964]。なお U Law Yone については FO 文書に記録されている [FO371-143858, DB1012/1 Aug. 20, 1959]。彼はビルマ・ジャーナリスト協会の会長だったこともある。

12) エーマウン博士 (Dr. E Maung) については、FO 文書によれば以下の通りの人物である [FO371-143858, DB1012/1 Aug. 20, 1959]。1898年生まれでラングーンとケンブリッジで教育を受ける。法律面のキャリアで最も成功。第二次世界大戦後も東京裁判で Advocate General を務める。1948年の独立の際には最高裁判所の裁判官になり、1949年には外務、保健、司法担当の大臣となる。この頃から与党とじっくりしなくなる。1954年には自ら中道右派の政党を設立、1955年には政府に対抗する野党を支持。1956年の総選挙では与党批判者の支持を受けて勝利した民族統一戦線 (National United Front; NUF) から出馬して当選。仏教心に篤く、ウーヌの親しい助言者でもあった。

チョーミンと同世代で同様にケンブリッジに学び、与党 AFPFL とは反りが合わなかった点で共通していると言える。

13) 与党 AFPFL 内の派閥抗争については佐久間 [1993] 参照。

II-2 アラカン人としての主張とビルマ人の理解

II-2-1 アラカン州設立要求

次にアラカン州設立への要求に移る。チョーミンは演説の最後で、「ANUO はビルマ連邦内でのアラカン州 (an Arakan State within the Union of Burma) 設立を要求しており、独立を要求しているのではない。しかしアラカン地方には独立した主権国家 (a Sovereign Independent State) を求めている分子がいる」と指摘する。おそらく ANUO が成立した1952年頃には、少なくともラングーン在住の高等教育を受けたアラカン人の間では、ビルマという国家の枠組みの中でのアラカン州という考え方が出始めていたと考えられる。¹⁴⁾ この考え方を議会に持ち込んだのがチョーミンである。

演説の中ではアラカン州設立要求に議会が応じることの必要性を、かつての英国のやり方を例に挙げて説明した。第二次世界大戦開戦直後の1939年11月に、ビルマを将来コモンウェルス [木畑 1997] の一員として独立させることを認めるとはしたものの、なかなか具体化しなかった時のことである。この遅延の故に、ビルマが完全独立を果たす方向に向かったとする。この議論は暗に、議会にとって自分たち ANUO が出している案を認めることが、政治的に得策であるとのめかしていた。

演説においては先ず、第二次世界大戦前に、アラカンに対してビルマとは別個の行政が行われるべきとした人物としてアラカン人トゥンアウン (Tun Aung) を取り上げた。¹⁵⁾ 続けて第二次世界大戦後になって、アラカン人はビルマ独立案に驚喜したとチョーミンは言う。少なくともチョーミンのような植民地期のエリートは、独立ビルマの政界での活躍を考えて、ビルマ独立を歓迎したのであろう。この時点では1950年代に明確になっていく現実の行政面でのビルマ

14) チョーミン同様に元インド高等文官の一人だったセインニョートウン (U Sein Nyo Tun, Rtd. ICS) は1952年の時点で既に、ラングーン大学におけるアラカン人学生の会の年報において連邦制とマイノリティーについて論じている。その論旨はチョーミンのものに似て連邦制がビルマという国家の枠組みを破壊するものではなく、軍・最高裁判所・外交などの権限を中央政府に与えるものであり、地方自治 (regional autonomy) は分離主義とは異なることを説明している。少なくともラングーン在住の高等教育を受けたアラカン人の間では、ANUO が成立したこの頃にはアラカン州という考え方が出始めていたと言えよう [Sein Nyo Tun, U 1952-53]。

15) トゥンアウン (U Tun Aung) は1893年アキャブ生まれ。ラングーン・カレッジを経て、1920年から法廷弁護士。日本占領期には法務大臣 (Minister of Judicial Affairs)。独立後は Buddhist Democratic Party を創設 [People's Literature Committee and House 1961]。

トゥンアウンの演説は第二次世界大戦以前に行われたもので、アラカンビルマに残るべきであるが、ラングーンから支配されるのではなく、個別に行政が行われるべきであるとしている。トゥンアウンは1920年にラングーンで結成されたビルマ人団体総評議会 (GCBA) の一員でもあった。このGCBAは親英的すぎるとして、後の世代に否定されがちであるが、英国の支配は認めた上でビルマ人とは別にしてほしいとする植民地期のアラカン人政治家の考え方も含み得る場であったのであろう。

なおラングーン大学に在学中のアラカン人学生が中心となって出版した雑誌の第一号の中で、レーアウンダイン (Rai Aung Daing) がアラカンの政治史を論じている。彼に拠れば、トゥンアウンは英領インドから英領ビルマを分離するか否かが議論された当時、アラカン北部へのインド人の流入を管理することや、英領ビルマが連邦制を採用し、アラカンがその一州となることが認められるよう主張したという [Rai Aung Daing 1951-52]。

によるアラカン支配は、アラカン人の側ではさほど考慮されていなかったと考えられる。

チョーミンは同時に、1952年に地方自治 (regional autonomy) という言葉の意味を知ったと、正直に語っている。「それ以前にもアラカンに対する統治制度として、大臣設置と州設立の、どちらを選択するかが問題となっていたが、地方自治という言葉の本当の意味を知らなかった。知ってからは大臣の人柄に左右されない州の設立を求めるようになった。また1948年10月におけるbauer卿 (Sir Ba U) の地方自治諮問委員会¹⁶⁾ 設置の意味も理解し評価するようになった」とする。ただし、演説は折角のbauer卿の委員会を活かせなかったことにあわせて、ウーヌ批判へと展開した。

実はチョーミンの演説が行われる前の週に、フラトゥンピュ (U Hla Tun Phyu)¹⁷⁾ が議会でアラカン州設立要求をしていた。しかしウーヌは自身がアラカン人を嫌っているという理由からではないと弁明もした上で、これ以上の州新設は連邦を弱体化させるとして、フラトゥンピュの要求を拒絶した。このことに触れてチョーミンはアラカン人が州を得るという考え方にいかに喜んだかを語り、スイスや米国やソ連といった様々な連邦国家の成功を挙げた。アラカンはアウンサンの州設立の基準¹⁸⁾ を満たしており、ウーヌの主張とは逆に、むしろ州設立を否定することがビルマ連邦の力を弱め解体を招くとした。このビルマ連邦内の一州としてのアラカン州をチョーミンが要求した際に、必ずしも現在のような「少数民族州」をイメージしていたとは考えにくい。むしろアラカンとさほど変わらない大きさのスイスの連邦制を特に理想としたことに見られるように、いわゆるビルマ本土も含めて、全ての州が同等の権限をもつ連邦制を

16) バウー卿の地方自治諮問委員会 (a regional autonomy enquiry commission) は、アラカンやモンの自治への願望を聞き届けるために1948年10月に設置された。bauer卿はビルマ連邦の高等裁判所長官であった。しかし結果として委員会はカレンとモンについてのみ採り上げ、アラカンの問題はそれほどのことではないと判断した。設置後1年以上すぎた1949年12月時点でも、アラカンの訪問調査さえなされなかった [FO371-75658 Jan. 29, 1949; FO371-75660-23890, F2686 Jan. 3, 1949]。

17) フラトゥンピュ (U Hla Tun Phyu) の綴りはアラカン語読みして、フラトゥンブル (U Hla Tun Pru) とすることもある。彼は1901年ムラウー近郊の Pazunphye 村生まれ。アキャブのミッション系の学校で教育を受けた後、GCBA の新聞 *Wunthanu Daily* の副編集者、1939-40年にかけて *New Light of Burma* の副編集者、そして森林担当官や労働者委員を経て、1951年の総選挙でアラカン北部のチャウトー南の選挙区から出馬当選し議員となる。1956年に選挙区をムラウーにかえて出馬し、更に1960年にも議員に再選された。ANUO の指導者の一人であり、アラカンの織物産業にも力を入れた [People's Literature Committee and House 1961; Hla Tun Phyu, U 1967; 1978]。

18) アウンサンの州設立の基準についてチョーミンの演説に引用されているのは、以下の4項目である。いかなる民族 (nationality) も州 (a State) を与えられるには、①自身の歴史的背景を持ち、②自身の自然的境界を持ち、③経済的な統一性であり、④自身の文化と言語と慣習を、持っていなければならない。この4項目は1991年に政府の情報省が出版した『1958-1962年ミャンマーの政治』[Burma, Ministry of Information 1991: 202] にも同様に書かれている。

なお1947年5月23日のアウンサンの演説によれば、州の設立の基準は以下の7点の内の全てあるいは幾つかを満たすこととしている。(ただしこの演説の際にはアラカン州設立はまったく考慮されていない。) ①独自の限定された地理的領域、②ビルマ語とは異なる言語による統一性、③文化の統一性、④歴史的伝統のある共同体、⑤経済的利益があり、経済的自給自足の手段のある共同体、⑥比較的人口が多い、⑦別個の集団としての明確なアイデンティティーを維持しようとする意志 [Silverstein 1993: 67]。

考えていたらしい。

つまりアラカンに明確な自治権を有する州制度を与えることによって、ビルマ連邦はより栄えていくとするのである。ビルマ独立が現実となってから、植民地制度下のアラカンの繁栄¹⁹⁾を再認識し、独立したビルマに対して植民地制度下におけるのと同様の位置を望んでいるのである。単一を中心を持たない連邦の構成州となることで、アラカンは植民地期のように繁栄することが出来るという考え方が読みとれる。

そしてビルマ独立後の1948年10月30日にウーヌ自身が行った演説を引用する。「全ての民族の満足 (Satisfaction of All Nationals)」と名付けられたその演説は、バウー卿の地方自治諮問委員会が結成された際に行われた。その中でウーヌは委員会が示した「モン人、カレン人、アラカン人といった、我々の兄弟のコミュニティー (fraternal communities) に対して、単に言葉だけでなく行いによって、我々の好意を示す」ということも主な課題であると明言したとする。そしてチョーミンはカレンにも1951年に州が与えられたと畳みかける。つまりアラカンが自治権を獲得することは、独立当初の政府指導者の方針において既に認証されていたことであるとした。

II-2-2 言語的条件

現在のアラカン出身者に尋ねると、アラカン語が独立した言語であると主張する者も少なくない。しかし一般にビルマ人及びビルマ研究者に拠れば、アラカン語はビルマ語の古い形を残した方言に過ぎないので、アラカン人はビルマ人との違いが少ないとされる。にもかかわらずチョーミンは、アラカン人とビルマ人の違いを主張する。

チョーミンはアラカン人がビルマ人の一部であるという考え方を、激しく否定する。当時ビルマ人は、アラカン人に州を認めてしまうことは「血を引き裂いてしまう (原文 *dividing the blood*)」ことであると考え、両者間に憎悪を起こさせると反対していた。つまりビルマ人の側はアラカンを独自の存在と認めていない。しかし、ここでのチョーミンの主張は「アラカンは常にビルマ本土とは、山脈によって切り離されてきた」とした上で「アラカン人とビルマ人では人種 (原文 *race*) が異なる」という議論に発展する。彼は「アラカン人とビルマ人の人種の違い」は「イギリス人とドイツ人の違いに類似」すると言う。この暴論とも言い得る発言はチョーミンが何にこだわったかを明らかにしている。ビルマとの違いを力説することで、その発言がかえってビルマ側だけを向いた発言であることを露呈している。ベンガル側とアラカンの近さが、意図的にか無意識にか無視されているのである。このベンガル側との関係無視については、

19) アラカンの植民地期の繁栄はチョーミンだけが主張しているのではない。ビルマ近現代史の古典、ケイディの著作にも1852年のアキャブ (シットウェ) は世界でも主要な米の輸出港であったとされる [Cady 1958: 86]。また Smart [1917] の13章にもある程度の輸出の伸びが記されている。

本論のⅢ章で扱う。

チョーミンは違いを主張してから、アラカン州設立へ向けて演説を展開する。チョーミンはアラカンがビルマの独立以来、ビルマ政府の誤った支配のもとに置かれてきたと考えている。非アラカン人（原文 non-Arakanese）による支配を受けること、アラカン勤務を嫌がりビルマ本土に帰りたい人々による支配を受けることへの不快感を示し、与党 AFPFL による地方行政を批判する。アラカンはビルマの植民地として統治され（原文 governed as a Colony of Burma）、ビルマ人帝国主義（原文 Burmese Imperialism）によって支配されていると言う。つまり、ここではビルマ人が明確に異国人として認識され、ビルマ人のアラカン行政への関与が拒否されるのである。

II-2-3 歴史的條件

チョーミンはアラカン王国についての自らの歴史認識を述べる。アラカン王国をモン人及びビルマ人の王朝と並置して、アラカン人としての独立性を強調した。17-18世紀の王国の栄光を語り、同時に第一次英緬戦争以後の英国の支配下にあった時期を評価する。コンバウン朝ビルマの王ボードーパヤーに征服されたが、英国のおかげでビルマの圧政からベンガル側に逃れていたアラカン人が帰郷出来たとまで言う。また植民地期には才能あるアラカン人はインド人や英国人の商人との競争にも関わらず、繁栄し得たとする。

ここでのアラカンは、ビルマと対等な独立地域であり、一時的にビルマに侵略されたが、英国統治の結果、ビルマの圧政を免れて繁栄を享受し得たとするのである。英国で教育を受け、英国支配下でその地位を築きあげた、チョーミン自身の経歴によって裏打ちされた発言である。しかしあくまでも経済的繁栄を基準に考えている点において、後のアラカン人としての主張が「独自の文化」に絞られていく傾向²⁰⁾と好対照を成している。ビルマ国家による支配とアラカンの繁栄を切り離し、独立後のビルマ国家が英領ビルマの後継者として、植民地期のような地方統治をすることを望んでいる。そして AFPFL 政権がアラカンの信頼を得るためには、州設立要求を認めるべきだとする。チョーミンはアラカンの国家としての独立は求めず、むしろ独立後のビルマが植民地期の英国のような統治を続けるべきだったと主張するのである。

連邦制のモデル同様、彼の思い描いた理想像は西欧政治の影響が強く、近代領域国家の論理と相容れない主張ではなかった。後で触れるように、彼はビルマという国家自体は否定しない

20) 筆者が入手した限りでは1960年代後半以降、特に1974年に少数民族州としてのアラカンが成立して以降のアラカンに関するビルマ語での出版物は、殆どが独自の伝統文化としての古典的な史謡、踊り、仏教、パゴダ、アラカン語、遺跡といったテーマに限られる。これは「独自の文化」を持っていることが、あとで述べる少数民族州設立の要件となっていること、政治的・経済的発言が検閲を通らないことによるようである。またこれも本論の後半で述べる仏教徒とムスリムの対立の構図成立の影響も受けていると考えられる。

し、中央政府の存在も認める。これは1950年代後半のアラカン人の主張としては最も近代領域国家の論理に取り込まれた議論であり、ある意味で1960年代以降のアラカンという空間認識に基づく主張の形態を先取りするものであったと言える。

III チョーミン演説に反映された状況

III-1 1950年代のビルマの政治状況とチョーミン

1950年代後半のチョーミンの主張は、第二次世界大戦が終了し、1948年にビルマ連邦としての国家が形成される過程でのアラカンの立場を表現していると考えられる。それまでのアラカンとしての主張には、ウーセインダーら仏教徒の僧侶を中心としたゲリラ、パキスタン側との国境を越えて活動していたムスリムのゲリラ、アラカン共産党など、地元に着する形で示されるものがあった。これらの中には、少なくとも運動開始直後の1940年代後半から末にかけては、ビルマやパキスタンといった国家を意識することなく、自分たちに直接関わる範囲の論理に基づいた主張がなされる場合があった。²¹⁾ これらはビルマ議会の中で主張したチョーミンのやり方と異なる。

しかしこれらは1960年代には、完全に中央政府を認めた上での辺境としての位置づけに変わっていく。1962年のネーウインのクーデター前では、アラカンはビルマとパキスタンの辺境と化しつつあったと言える。アラカンの辺境化は当時の東南アジアにおいて連邦制による分権化を目指すよりも、中央集権的国家を建設しようとする傾向があったこととも関連づけられる。この傾向は結果として植民地の単位と枠組みを利用するものでもあった。チョーミンのこの演説は以後の動向を先取りしたものとも考えられ、特に1960年代には、アラカンの主張は完全に中央政府を認めた上での権利要求となる。この変化を理解するためには、1950年代の政治状況についての考察を行わねばならない。

独立1年後の1949年2-4月の政府は「ランゲーン政府」と言われるまでに弱体であった²²⁾が、その後徐々に自らを強化していった。政治過程も成熟してきて、バットウェルに拠れば1956年の総選挙で独立後のビルマ政治において初めて、野党がその効力を発揮するようになった。そしてこの選挙において最大野党として勝利を収めた国民統一戦線 (National Unity Front; NUF) に ANUO は大いに協力した [Butwell 1963: 146]。国軍の支配力も徹底してきて、²³⁾ 1958年は

21) 筆者が上智大学大学院に提出した1996年度の修士論文 [齋藤 1997a]、また1997年度東南アジア史学会春期研究大会での報告 [齋藤 1997b] において、アラカンの名のもとに行われてきた主張や運動の多義性を分析した。

22) Cady [1958: 595]、及び Butwell [1963: 105] などに当時の様子が描かれている。

23) 1950年代は一般にウーヌ政権の支配力が弱く、自由であるが混乱した時期だったとされる。しかし筆者は修士論文において、この時期を通じて近代領域国家としてのビルマの統治能力が強まったとし、主に対少数民族政策の三点を指摘した。①仏教国教化政策、②ビルマ語の国語化、③武力での抑圧で

反乱軍が大量に投降した年となった。アラカン人ムスリムのムジャヒッドの反乱も、1954年以降下火ではあったが、1958年に実質的に終わる [FO371-143857, DB1011/1 Jan. 12, 1959]。それまで政府に与せず武力闘争を行っていた者にとって1957年頃は、投降服従するか、より先鋭化した反乱活動に参加するかの岐路にあった。この時点でチョーミンがビルマ政界の内部にいて、その政治的手腕によってアラカン人としての主張をしているのである。

III-2 英国によるチョーミン演説の評価とその背景

それでは1950年代のアラカンとビルマを取り巻く政治状況を、英国側はどのように理解していたのだろうか。

1957年5月10日の報告書におけるビルマ駐在の英国大使アレン (Richard H. S. Allen) の論評を分析し、当時のアラカンとビルマを取り巻いていた状況を英国側が、どのように把握していたのかを考えていく。アレンは個人的に、チョーミンと交流のあった人物である。アレンはチョーミンの主張を以下のように捉えて、一定の評価を与えている。つまりアラカンとしての主張が殆ど記録されていないという状況の中で、チョーミンの演説は公の場でなされた貴重な例であること。また中央政府を認めた上で、アラカン地方としての自治を求める1960年代以降の主張の形態を先取りするものであったことも挙げられる。このためチョーミンの主張は、ある程度説得力を持ったものと英国側には認められていたのである。

アレンは、アラカンはビルマ連邦の中で無視されてきた部分であり、情報が殆ど入らないとのコメントを先ず提示し、アラカンの置かれた状況を、ほぼ以下の6点にまとめる。

①北部は豊かな米の産地であり、そこからはパキスタン国境を越えて余剰米が輸出または密輸される。しかし丘陵地域や南部は米が不足する。アラカン人は、こうした状況を改善しよう中央政府に主張してきたし、選挙の際には多くの約束がなされたが、果たされていない。②ビルマ本土との陸路も整備されていない。③特に独立志向の強いアラカン北部の住人に対する政治的な悪意もあるようである。④カレンやカチンが自分たちの州を得ているのに、アラカン人には州が認められていない点が注目される。ビルマ人にとってアラカン人という人種 (原文 race) は存在せず、彼らがビルマ人ではないと主張するのは愚かなことであるとされる。しかしながらアラカン人には個別のナショナリティーがあるとの意識が強く、何世紀にも亘る独自のアラカン王国の存在があった。⑤ただしビルマ支配に対する不満は、南部ではそれほど深刻で

ある。この点について参考になる議論を、キャラハンが行っている [Callahan 1996]。本論との関係で興味深い指摘は、①1962年の軍事クーデターを可能にした1950年代における軍の再編と強化統合 (consolidation) について、軍の内部資料を用いて詳述している点、②軍の系図と、ビルマという国家の出現 (the emergence of this nation-ness) が結びついていることを証明した点である。この論文は焦点が主に軍内部のことに向けられているため、アラカンという空間認識に基づく主張を検討する本稿とは視点が異なる。しかし領域国家内部がこの時期に軍と共に形成されていったことが証明されると、アラカンが1960年代には完全に中央政府を認めた上での辺境と化していく事情がより明らかになる。

はない。アラカン王国もアラカンの北部が中心であった。アラカン自治州が与えられたとしても、アキャブの従来の富裕な指導者たち（チョーミンはこの分類に該当する：筆者註）はビルマ政府ほど南部を助けはしないだろう。⑥アキャブを含むアラカン北部には自治どころか独立を支持する機運がある。これは単にビルマ人に対抗するだけでなく、チッタゴン（現バングラデシュ内の港町）からの移民に対抗するものでもある。マウンドー郡の殆どやブティダウン郡北部を占めている彼らを、アラカン人は武力でも追放した上で、ビルマの支配からも独立でありたいと考えている。ただしムスリムの武力抵抗運動の一つであるムジャヒッド運動はビルマ軍によって沈静化している。²⁴⁾

ここで強く説明されているアラカンは、チョーミンの主張するような一体性をもった存在ではない。実際、英領時代のアラカン管区、後のアラカン州になる地域の内部は、決して一つにはまとまっていなかった。アラカンとしての主張を行うチョーミンは触れないが、特に南北の政治的温度差は大きかった。南部はビルマ本土に近く、陸路もあり、植民地期以来ビルマ人の移住も多かった。病院や単科大学も、アラカンで最初に作られたのは南部の町チャウピュである。1999年の時点でも、北部には空路もしくは海路のみがビルマ本土とつながる手段である。

こうしてアレンは結果的にチョーミンの主張を、アラカン北部のものと限定し、相対化する。しかし同時に、アラカン北部の主張としては、その有効性を認めるのである。

つまりチョーミンの3月12日の演説は過激なものではあったが、アラカンに対する政府の対応への批判として相当に的を得ているとアレンは見なすのである。①英国の支配下のアラカンでは、多くのアラカン人が行政に関わっていた。それが1950年代後半当時では90%の職がビルマ人によって占められている。②アウンサンが何らかの自治の約束をアラカン人にしたらしい。③ビルマ政府が1956年の総選挙の際にアラカンで相当の干渉を行ったらしい。²⁵⁾ こうした3点にわたるチョーミンの非難は全て、あまりに真実をついているとアレンは記した。そして結論部でアレンは、ビルマ人とアラカン人の関係は特に良好とは言えないと危惧する。ビルマ政府はアラカンの支持と協力を得ようとする代わりに、ビルマ人官僚によって押さえ、投票者たちをビルマ人軍隊で脅迫し得ると考えた。この近視眼的な政策がアラカンあるいはビルマ連邦に何をもたらすのか気懸かりであるというのである。

24) ムジャヒッド運動は1954年を境に沈静化していった。ムジャヒッド運動とは、ビルマ独立後の1940年代末、中央政府の存在をさして考慮せずに、アラカン北部においてムスリムが行った、その土地に住む者としてその状況を反映した主張。ムスリムの分離主義との解釈もあるが（例えば Christie [1996: Chapt. 8]）、むしろアラカン北部としての固有性を主張したと捉える。

25) アラカンにおける選挙妨害の実例としてチョーミンが演説において挙げているのは、選挙母体から ANUO 支持者の仏教徒5,000人が除外されたこと。AFPFL に投票するよう軍隊が脅迫したこと。AFPFL の敗北が確実な選挙区において、投票が延期されたこと。しかもチャウピュを始め、複数の選挙区で延期が繰り返されたことである。

チャーミンは得意の英語を駆使して、英国を意識したであろう演説を行った。そしてアラカン人を代表する者と自負していた。しかし英国側の担当者は、チャーミン演説を与党の AFPFL 批判として評価していた。当時の英国にとってのアジア政策では、地域を安定化させ自国の権益と影響力を保持しておくことが最大の眼目であったとされる [木畑 1996: 62]。²⁶⁾ 英国の東南アジア戦略の中で、大きな位置を占めていたとは考えられないビルマについても、ほぼ同様であったであろう [FO371-169750, DB1015/6 Feb. 5, 1963]。²⁷⁾ 英国政府は結局、ビルマという国家の枠組みの存続を求めている。この文脈から考えるとチャーミンの演説は、この国家の枠組みを越えず、改正を求める意見として英国側によって評価されていると言える。

26) なお反共政策の一環としての政治介入も、ビルマに関しては英国は殆ど行っていないようである。ここで詳しくは論じないが、親米反共的にさせるべく非常な神経を使い、そればかりに目が行っていたように見える米国の政策と英国の政策は一線を画す。ビルマ共産党の動きに関する情報は勿論、細かく集めてはいたが、それほど脅威となり得るとは判断されていない。ビルマの国家がより強力になることを願う程度である [FO371-129403, DB1015/29 June 5, 1957]。

英国政府の国益という視点から見たビルマについては、本論で扱った時期と多少ずれるが、1960年代初めの FO 文書にその一部が明らかにされている。商業的利益関係という意味でのビルマは、石油や鉱物資源そして貴石の産地であった。しかもこの時期に、英国の利害は、ビルマ政府による全ての国有化の方針の中で弱められていった。ネーウィンのクーデター後の1963年に、英国の影響力の低下を認める文も入った段落の中で、以下のように述べられている。「女王陛下の政府の政策は、ビルマが自由かつ独立を保ち、特に共産主義の脅威に充分耐えうるよう、安定のみならず繁栄していることを期待する」 [FO371-169750, DB1015/6 Feb. 5, 1963]。

また1958年2月に書かれた1957年のビルマに関するまとめにおいても、ビルマからの輸出量が重要視されている。英国はビルマに対して公共事業を提供してきた。このためビルマ側から技術と設備の面で評価されている。

ビルマの外交関係についての分析においても、英国の将来取るべき態度として以下のように述べている。「[1954年4月に行われた首相会議を基盤とする] コロンボ計画において、ビルマは非英連邦の中で最大かつ最良の支援を英国から得ている。英国としては、今後専門家を任命し、専門家の推奨に従って設備を提供するという案もある。また英国で訓練された人の数も増えている。しかしながらコロンボ計画の該当国の中で、ビルマの努力は非常に不十分で、ビルマの経済に決定的な影響を及ぼすには至っていない」。

英国側はビルマへの大規模な関与は行わないにしても、一定レベルの影響力の維持は考えていた。「1958年当時の英緬関係においては、コロンボ計画とブリティッシュ・カウンシルの特に教育面での活動が最も好調で、両方とも拡大しつつある。近い将来ブリティッシュ・カウンシルの講師をラングーン大学など2、3の大学に、派遣するであろう。彼らは1942年以降のカオスの中で育ってきた若い世代に、良い影響を与えるであろう」 [FO371-135726, DB1011/1 Feb. 10, 1958]。

更に1962年以降のネーウィン政権の前兆となる、1958年のネーウィンの暫定政権に対しては、ラングーンの混乱を収めたとして英側は肯定的な評価を下している。「ラングーン大学の浄化」への評価に1950年代のビルマ情勢に対する認識の一端が窺われる。大学は1958年後半以来の軍部による介入があるまで「無知で怠惰で問題を起こしてばかりで、共産主義者に支配された学生同盟が多数入り乱れて活動していた」というのである [FO371-143857, DB1011/1 Jan. 12, 1959]。

つまり英国にとってのビルマは強く安定した、原料を輸出してくれる国家であって欲しく、またビルマが英国への尊敬を持ち続け、英国の影響力が行使し易い国であって欲しいのである。

27) 更に、チャーミンという政治家の存在自体も、英領時代からの連続性をもった人物として、ある程度評価されるものであったであろう。独立ビルマ混乱の理由の一つとして英国人官僚及び従来の ICS 出身ビルマ人の排斥が、1962年のクーデター後の分析の中で述べられている。

III-3 アラカン内における「対立」の構図

チョーミンはアラカンを一体のものとして捉え、自らをその代表と見なしていたが、実際には一枚岩としてのアラカンは存在しない。

III-3-1 アラカン人の中における AFPFL 系と ANUO 系の政治的対立

チョーミンが中心となっているのは、政党 ANUO である。彼が率いた ANUO の主張は1957年12月当時のフェアバーンの時事論文に、アラカンを代表するものとしてまとめられている[Fairbairn 1957]。²⁸⁾ しかしながら ANUO は彼らが自負したアラカン人仏教徒の支持さえ必ずしも完全には受けていなかった。同論文の中にもこの対立について記されている。フェアバーンに拠れば、1957年に僧侶に対してアキャブ駐留のビルマ海軍が無礼な行為をした際、アキャブではすぐに僧侶を中心とした6,000-7,000人のデモが行われたにも拘わらず、この ANUO のメンバーはデモに一切関わらなかったとされる。なお、ANUO 系の政治家が植民地期に比較的富裕だった者が多く、AFPFL 系は1930年代から台頭し始めた比較的貧しい出身の者が多い点から、これは世代間・社会的格差の問題とも考えられている。²⁹⁾

チョーミンは中央政府がアラカンに関して考慮する際に、アラカンを理性的に代表出来る存在は自分であると主張する。ANUO としては未だ連邦内での自治を求めているが、これが得られないなら、独立を要求する人々の感情に押し流されるかもしれないと、1957年頃に政府に対して述べたと言われる。これは一種の政治的駆け引きであると共に、ANUO がアキャブの一般の人々からも乖離していたことをも示している。ただしこの問題の詳細な検討は今後の課題としたい。

III-3-2 アラカン人の中における仏教徒とムスリムの対立

ANUO にとってアラカンに住むムスリムは排除すべき存在であり、彼らとの共生や協力は考慮されていない。つまりチョーミンがアラカンを代表するものとして主張した際に欠けていたのは、ムスリム住人を含んだ土地としてのアラカン認識である。チョーミンの懐古する植民地期のアラカンには多数のムスリムや、ベンガル地方からの移民が混住していた。しかし、この国境が厳密に決定されるのは1960年代になってからである。そこでパキスタン、ビルマ両国の

28) これは「AFPFL やその他のいかなる集団に対しても反対するものではない」が「アラカン人のために協力して働く」ものであった。ちなみに、このフェアバーンは演説の約2カ月後の1957年7月17日に、チョーミンが自身の経営する全国紙 *Nation* に掲載した記事をもとに、チョーミンの主張を2点にまとめている。一つは当時のアラカン人としての主張であり、中央政府による行政の失敗や、様々な行政サービスにおける「ビルマ化」がもたらす問題である。もう一つは与党 AFPFL のやることに対してアラカン人側が「AFPFL 帝国主義」と名付けるようになった問題である。つまりフェアバーンの解釈による限り、ANUO の主張、フェアバーンの理解するところのアラカンとしての主張は、当時のビルマの国内政治への不満を表現するものであった。

29) ビルマの政治家の違いを世代ごとに分けて論じたものには根本 [1997] がある。

独立直後はともかく、1950年代になってくると、しばしば国境が両国間で問題化し始める。³⁰⁾

1940年代後半にはアラカンに住むムスリムも、国家を創るのではないかと考えられていた。³¹⁾ このインド・パキスタンの分離独立の際には、アラカンが若干の考慮の対象となっていたことが、ジンナー・ペーパーの中に含まれるムスリム左派たちからの書簡から分かる。「アラカンなしにはベンガルの立場が、経済的・戦略的に弱くなるし、将来アラカンとアッサム丘陵が一つの独立国家を形成しようとしたらチッタゴンが不安定になる」[Z. H. Zaidi 1993: 文書102]。また「原則としてマイノリティーとして非ムスリム国家に散っているムスリムは、イスラム国家に加入するべきだ」とし、「マウンドーやブティダウンといった、アラカン北部の地区のムスリムは希望するならパキスタンに含まれるべきだ。しかしビルマ人ムスリムは、ビルマ独立のためにビルマ人と協力すべきである」としている[*ibid.*: 文書375]。ただし1947年にインドとパキスタンが分離独立した際にアラカン北部は含まれず、1948年にビルマもまた一定の領域の支配を主張する国家として独立すると、ナフ河が国境となった。

アラカンのムスリムの主張が行われた背景として以下のことも考慮する必要がある。ビルマ連邦内のアラカンとは直接の政治的関係はないが、独立後の東パキスタンでは、ベンガル国語化運動が行われており、1956年にはベンガル語が国語の一つとして認められた。この運動は後のパキスタンからの独立を目指す動きにつながる。³²⁾ 正確な人数は分かっていないが東パキスタン側にもアラカン人仏教徒及びムスリムは住んでおり、彼らにとってはこれらのベンガルにおけるナショナリズムがビルマ本土の者にとってよりも、身近であったと考えられる。

また AFPFL 側では1950年代半ばから60年代前半にかけて、アラカンのムスリムを反 ANUO に利用したふしが窺われる点も考慮に値する。政府系の英字月刊誌『ガーディアン』にアラカンに住むムスリムの側の記事が断続的に掲載された。1990年代の現在ではアラカンに住むムス

30) 東西パキスタン、ビルマ各々の独立当初は、必ずしもこの問題に触れる余裕は無かったと見られる。1954年にムジャヒッド運動が勢いを失う頃から、外交文書に、この地に関する情報が増え、国境問題として扱われるようになる。より具体的に述べれば、ムジャヒッド運動の指導者の一人、カシム(Kassim/Cassim などの綴りがある)が1954年に逮捕され、その処置をきっかけに両国が対話を重ねていくことになる。これについては FO 文書に逮捕当時の対応が見られる [F0371-111960, DB1015/12 July 20, 1954]。

既述の1959年1月に英国大使館のアレン大使夫妻がアキャブを訪問した際、空港で出迎えた人々の中にはチョーミンの支持者と共に、パキスタンの在アキャブの副領事カイサル・ラシード(Kaiser Rasheed)もいたのである。

31) パキスタンを形成していく側の認識としては、1947年前半にアラカンに関して以下のような認識を持っていたことが分かる。「将来的にはアラカンがアッサムの丘陵地帯とともに国家を形成する可能性があり、これを取り込まないとチッタゴンやベンガル湾が不安である」という分析もあった。あるいは「アラカン北部のブティダウンやマウンドーはパキスタンに結びつけられるべきである、というムスリム連盟左派の意見」もあった。ただし、最終的にはビルマ人(おそらくビルマ国境内の、アラカン人を含む: 引用者註)ムスリムはビルマ人の独立闘争に参加すべきであるとの判断がなされた [Z. H. Zaidi 1993: 文書102 (Najmul Huq to M. A. Jinnah, F. 886/81-86, 7 March 1947, pp. 197-199), 文書375 (Ali Asadullah Khan to M. A. Jinnah, F. 976/141-142, 1 May 1947, pp. 661-665)]。

32) このベンガル国語化運動については臼井[1990]を参照のこと。

リムがひとまとめに「外国人」として扱われる傾向にあるが、当時はむしろ積極的に「彼らの立場」を取り上げたようである。それらの記事の中でチョーミンは名指しで私利私益を追求する政治家として批判されている。チョーミンの主張がアラカン人の中でごく少数派であることを示して、牽制しようとする意図があったようである。³³⁾

III-4 仏教を基盤とした、アラカンのビルマ連邦内への位置づけ

チョーミンはその状況の中で、「仏教徒とムスリムの対立」という構図を強調する。それでは何故、あえて仏教徒としての主張を行ったのだろうか。背景としては、以下のことが考えられる。

①ビルマ中央政治へのアラカン人仏教徒の不满を、ムスリムへの反発に置き換える。第二次世界大戦中から顕著になった、ムスリムと仏教徒の対立³⁴⁾の政治的利用である。仏教徒のアラカン人としての主張は仏教徒—ムスリム両者間の対立に矮小化されることで、ビルマ連邦内に住む者の目を中央政治への不満から逸らす役割をも担わされることになる。これはアラカンの中での仏教徒同士の分裂を解消し、連帯するためにも利用される。

②ビルマ中央の仏教徒との親和性を醸成しようとする。仏教徒を中心に国家形成を行っていくというビルマの政治的文脈の中で、ビルマ連邦の一州としての立場を獲得しようとするものである。1950年代のビルマではウーヌ首相を中心に、仏教国教化をめざす動きがあった。チョーミンらアラカン人仏教徒がウーヌを基本的には支持する方向に向かったのは、同じ仏教徒だったからなのか、何か他の理由があったのかは記録がなくて定かではない。しかし1958年の与党内の分裂によって、ウーヌはチョーミンらの支持を必要としていた。そしてウーヌは、支持と引き替えにならアラカン州の設立を認めても良いという判断を示す。おそらく1958年までに、

33) *Guardian Monthly* (Rangoon) には以下のような記事が掲載されている。

書き手の名前がムスリム風であったり、名前にアラカン北部の住人であることを示す地名が入れている。

by "Asmi," 'The State of Arakan' (2), vol. 1, no. 11, Sept. 1954

by "Asmi," 'The State of Arakan' (3), vol. 1, no. 12, Oct. 1954

by "Asmi," 'The State of Arakan' (4), vol. 2, no. 1, Nov. 1954

by Ba Tha, 'Rowengyas in Arakan', May 1960

by Mohamed Akram Ali, 'Unity among Ourselves', Aug. 1960

by Ba Tha (Buthidaung), 'Slave Raids in Bengal or Heins in Arakan', Oct. 1960

by Ba Tha (Buthidaung), 'Coming of Islam to Arakan (a brief study of Islamic civilization in Arakan)', Mar. 1965

34) アラカン人仏教徒として、まとまる傾向が第二次世界大戦中から顕著になったことについては、Thompson and Adloff [1955: 153] などにある。

他にも例えば FO 文書 [FO371-75660, 23890, F213 Mar. 1949] から、おそらく植民地期のアラカンにおいて、仏教徒とムスリムの対立という構図が目立ったものではなかったといえる。そこには「英国の統治下の116年に亘って、2つのコミュニティはさほどの事件もなく、混ざり合ってきた (intermingled)。潜在的な敵対意識 (latent hostility) が、時折燃え上がったりはしたが」と記されている。

ウーヌとチョーミンは何らかの利害関係の一致を見たと言えるだろう。³⁵⁾ チョーミンが仏教徒としての少数民族州の獲得を目指したことは、ウーヌが勝利した1960年2月の総選挙での公約「少数民族の自治権拡大」と「仏教国教化実施」の方針に適合する。

こうしてアラカン人とは、仏教国教化さえ議論されていた国家の仏教徒であり、ムスリムは外国人であるとの主張が強まっていく。アラカンのムスリムの運動としては1960年代以降、ロヒンジャとしての主張が盛んになる。ムジャヒッド運動とロヒンジャの運動の繋がりは必ずしも明瞭になっていない。しかし結果的に、この対立の構図はチョーミンのアラカンの主張を、アラカンの中での仏教徒とムスリムの対立に矮小化させた。こうした主張では、ビルマとベンガルを結び付ける形で位置する、仏教徒とムスリムのいずれもが存在してきたアラカン地方を説明できないからである。しかしこのきわめて政治的な議論の傾向は、その後も現在に至るまで弱まっていない。³⁶⁾

III-5 1960年代以降のアラカンとしての主張

1960年代に入ると、チョーミンは政治の表舞台には出なくなる。1959年1月に英国大使館のアレン大使夫妻と一等書記官らがビルマの第三の港であるアキャブを訪れている。彼らを案内したのは前年の内閣においては蔵相であったチョーミンである [FO371-143862, DB1016/4 May 1959]。1958年6月から暫定政権を担ったネーウィンがアラカン人嫌いなこともあり、チョーミンはゴルフと『ネーション』紙に帰ったと英国側の記録にある [FO371-143858, DB1012/1 Aug. 20, 1959]。1979年になってチョーミンが宗教省を通じて出版した本は、仏教徒の瞑想を英語で論じたものである [Kyaw Min, U 1979]。

アラカン州設立運動は、アラカン内部にも賛否両論³⁷⁾を抱えながら進められ、1960年に独立以来首相を長く務めたウーヌが、選挙の公約で設立を認めたりもした。このためより具体的な州行政についての議論も行われ、チョーミンはバミヤイン³⁸⁾とアラカン担当大臣の座を争い、

35) このチョーミンらとウーヌの利害関係の一致については、FO文書に書かれている [FO371-143859, DB1015/1 Feb. 1959]。それによれば1958年6月の下院での投票の際、チョーミンの助けによってウーヌは必要な得票数を確保できたとされている。

36) 1990年代に出たアラカンに関する研究の面でも、筆者の知る限り、この傾向がある。例えば具体的には15-17世紀に栄えたアラカン王国が、そもそもイスラム的であったのか仏教的だったのかということが議論になる。これについて筆者は両方であったと推測するが、以下のレイモンのコメントが的確であると思われる。「今日でも未だに、この問題はバングラデシュとミャンマー連邦(原文)の関係を悪意で歪めている」 [Raymond 1995]。これは今のところ事実の問題というよりも、現代の政治を反映した議論と考える。

37) アラカン州設立に対するアラカン内部の賛否については、例えば1960年6月から翌1961年4月までの英字新聞『ガーディアン』紙にも頻繁に触れられている。それを読む限り、反対しているのは主にムスリムである。この報道が直接に、ムスリムは外国人であるとする政治的傾向をもったものであるかは不明。

38) バミヤイン (U Ba Myaing) は1894年にチャウピュ地区のラムリー島に生まれた政治家。父は植民地期の地元の土地登記係りだった。1917年にカルカッタ大学で B. A. を、1926年にラングーン大学で B. L. を得る。1949年の退職まで地区の裁判官などを務める。ANUO の指導者の一人。1950年からア

AFPFL との関係によって敗れるということもあった [Burma, Ministry of Information 1991: 255-256]。しかしアラカン州設立の公約は、国家統一維持を掲げて1962年に軍がクーデターを起こすきっかけの一つとなり、クーデターの結果立ち消えとなった。1974年に民政移管の象徴としてアラカン州という形が与えられるが、ビルマ社会主義政権下の各「州」に自治権はなかった。1960年代以降、アラカン人の表だった政治的主張は殆ど出せなくなり、武力的主張も「ビルマの圧政への抵抗」という形に限定されてくる。

IV お わ り に

本論は1957年にアラカン出身の議会政治家チョーミンの議会演説と、当時のビルマ駐在英国大使アレンの評価を通じて、1950年代末、軍事クーデター直前のアラカンの主張の意味と受けとめられ方を検討した。これにより、チョーミンの演説の分析を通して、彼の主張の意味を考察し、かつビルマ中央政界における一地方の位置づけがなされていく過程を検討した。

チョーミンの主張はビルマ議会の中で行われたものであり、当時の政府批判として一定の評価を受けるものであった。ビルマ政府の行政下に置かれるのを嫌い、植民地期の設定に基づいたアラカンの領域の中では自分たちが主導権を握りたいとするものであった。アラカンビルマ本土や他の州と対等な立場とする、言葉本来の意味での連邦制の実現を主張したものであった。また同時にアラカン地方を植民地期の領域区分で固定化した上で、内部の多様性を無視し対立を強調していくことになる主張でもあった。またチョーミンの主張がアラカン地方に実際に住む人々から必ずしも支持されなかったのは、彼がアラカンと認めたものが実態とは異なるにも関わらず、統一体として存在するものと規定し、ビルマの議会において議論を展開したことも理由の一つである。このためチョーミン自身が設定したアラカンの内部においても、受け入れられる基盤が見出せないままに独立後のビルマの権力闘争の中で消えていくことになる。しかしながら、その演説は国家としてのビルマが必ずしも満足に機能していないという批判として、ビルマ駐在英国大使によって評価された。

従来、独立後のビルマ政治の評価は与党 AFPFL 側の立場からなされることが多く、チョーミンの主張は植民地の手先が国家の利益に反することを主張したものとして殆ど無視されてきた。しかし、逆に排除されたチョーミンらの主張を検討することは、国家としてのビルマ成立の歴史を相対化する視点となり得るものである。

→ キャブの市の委員 (Akyab Municipal Committee) でもあり、1960-61年には委員長も務める。1952年と1960年にラムリーの選挙区からビルマ議会に選出され、1961年5月16日にはアラカン担当大臣に任命された [People's Literature Committee and House 1961]。

なおチョーミンはアラカン担当大臣の座をバミヤインと争ったとされるが、完全な敵対関係にあったのではないと考えられる。本論で扱った演説の中でも「アラカンの政治的な高まりに最大の影響力をもった偉大な長老」と形容し、彼のような人物は中央政界にいないと慨嘆している。

[注 記]

*用語について

本論では狭義のビルマ人としての Burman と、ビルマ連邦の国民としての Burmese を区別する。また国名については、この時期の対外名称に従う。またビルマ語名称には必ず敬称がつくが、慣用化しているウーヌを例外としてカナ表記からは外した。なお初出の際に括弧内に入れたアルファベット表記には、使用した資料に一致する敬称が付けられている。

参 考 文 献

1. 外国語文献

- Arakan Historical Research Society. 1929. *The Journal of the Arakan Historical Society* 1(1).
- Becka, Jan. 1995. *Historical Dictionary of Myanmar*. Metuchen, NJ, London: Scarecrow Press.
- Burma, Ministry of Information. 1991. *1958-1962 Myanmar Nainnganye*, Vol. 3. (ビルマ語) (タイトル邦語訳『1958-1962年 ミャンマーの政治』)
- Butwell, Richard. 1963. *U Nu of Burma*. Stanford: Stanford UP.
- Cady, John F. 1958. *A History of Modern Burma*. Ithaca & London: Cornell University Press.
- Callahan, Mary Patricia. 1996. *The Origins of Military Rule in Burma*. A Dissertation presented to the Faculty of the Graduate School of Cornell University.
- Christie, Clive J. 1996. At the Frontier of the Islamic World: The Arakanese Muslims. In *A Modern History of Southeast Asia: Decolonization, Nationalism and Separatism*, pp. 160-171, Chapt. 8. London: Tauris Academic Studies.
- Donnison, F. S. V. 1953. *Public Administration in Burma: A Study of Development during the British Connection*. London, NY: Royal Institute of International Affairs.
- Fairbairn, Geoffrey. 1957. Some Minorities Problems in Burma. *Pacific Affairs* 30(4): 299-311.
- Hla Tun Phyu, U. 1967. *The History of Spinning and Weaving Technology (Burma)*. Rangoon: Boudawada Theikpan Sazin. (タイトルのみ英語, 本文ビルマ語)
- _____. 1978. *Kyunaw Tawdha*. Rangoon: Sabai Sape. (ビルマ語)
- Htoon Chan, U. 1905. *The Arakanese Calendar with the Corresponding Dates in Burmese and English, 1820-1918*. Akyab: The Arakan News Press.
- Kyaw Min, U. (Rtd. ICS). 1945. *The Burma We Love*. Calcutta: Bharati Bhavan. (本文中のタイトル邦語訳『我らの愛するビルマ』)
- _____. 1979. *Introducing Buddhist Abhidhamma, Meditation and Concentration*. Rangoon: Department of Religious Affairs.
- Mohammed Yunus. 1994. *A History of Arakan: Past & Present*. Chittagong: Current Book Centre.
- People's Literature Committee and House, ed. 1961. *Who's Who in Burma, 1961*.
- Rai Aung Daing. 1951-52. Political History of Arakan. *The Rangoon University Dhannyawadi Annual* 1(1): 16-18 (English Section).
- Raymond, C. 1995. Etude des relations religieuses entre le Sri Lanka et l'Arakan du 12e au 18e siecle: documentation historique et evidences archeologiques. *Journal Asiatique* 283(2).
- Sein Nyo Tun, U. (Rtd. ICS). 1952-53. Federalism and the Minorities. *The Rangoon University Dhannyawadi Annual* 1(2): 7-10 (English Section).
- Silverstein, Josef. 1993. *The Political Legacy of Aung San* (Revised Edition). Ithaka: Cornell University, Southeast Asia Program, Department of Asian Studies.
- Smart, R. B. 1917. *Burma Gazetteer, Akyab District*. Rangoon: Superintendent Government Printing and Stationary.
- Thompson, Virginia; and Adloff, Richard. 1955. *Minority Problems in Southeast Asia*. CA: Stanford Univ. Press.
- Tinker, Hugh. 1959. *The Union of Burma: A Study of the First Years of Independence*. London: Oxford Univ. Press.

Z. H. Zaidi, ed. 1993. *Quaid-I-Azim Mohammad Ali Jinnah Papers, Prelude to Pakistan (20 February–2 June 1947)*. First Series 1–1, Quaid-I-Azim Papers Project. Islamabad; National Archives of Pakistan.

2. 在ロンドン公文書館文書 (PRO 文書と略記)

FO371-75660-23890, F2686. Jan. 3, 1949. Review of the Situation in Arakan during 1948.
FO371-75658. Jan. 29, 1949. Burma: Annual Review for 1948.
FO371-75660, 23890, F213. Mar. 1949. Reports on the Situation in Arakan.
FO371-83104. 1950. Personalities for Burma for 1949.
FO371-111960, DB1015/12. July 20, 1954. "Mujahid" Movement.
FO371-129403, DB1015/4. Jan. 14, 1957. Summary of the First Nine Years of Burmese Independence.
FO371-129403, DB1015/15. Mar. 25, 1957. Visit for Akyab.
FO371-129403, B1015/28. May 10, 1957. A Short General Account of the Situation in Arakan.
FO371-129403, DB1015/29. June 5, 1957. The Insurgent Situation in Burma.
FO371-135726, DB1011/1. Feb. 10, 1958. Burma Annual Review for 1957.
FO371-143857, DB1011/1. Jan. 12, 1959. Burma Annual Review for 1958.
FO371-143858, DB1012/1. Aug. 20, 1959. Leading Personalities in Burma.
FO371-143859, DB1015/1. Feb. 1959. Report on Burma in November 1958.
FO371-143862, DB1016/4. May 1959. Tour of Arakan Coast.
FO371-143857, DB1012/1. Aug. 20, 1959. Leading Personalities in Burma.
FO371-169750, DB1015/6. Feb. 5, 1963. General Survey of Burma in Relation to Her Neighbours.
FO371-175140, DB1671/1. May 27, 1964. The Demise of the "Nation."

3. 日本語文献

木畑洋一. 1996. 『帝国のたそがれ——冷戦下のイギリスとアジア』東京：東京大学出版会.
———. 1997. 「帝国の残像——コモンウェルスにかけた夢」『帝国とは何か』山内昌之他（編），203-223
ページ所収. 東京：岩波書店.
根本 敬. 1995. 「植民地ナショナリストと総選挙——独立前ビルマの場合（1936/1947）」『アジア・アフリ
カ言語文化研究』48・49合併号.
———. 1997. 「ビルマの都市エリートと日本占領期——GCBA, タキン党, 植民地高等文官を中心に」
『東南アジア史の中の日本占領』倉沢愛子（編），31-56ページ所収. 東京：早稲田大学出版部.
齋藤瑞枝. 1997a. 「建国期ビルマの政治史における, アラカン地方の『ナショナリズム』」1996年度上智大
学外国語学研究科国際関係論専攻修士論文.
———. 1997b. 「狭間と近代領域国家——1950年代のアラカンの地域主義」(1997年度東南アジア史学会
春期研究大会での報告).
佐々間平喜. 1993. 『ビルマ（ミャンマー）現代政治史』（増補版）東京：勁草書房.
浦野起央；西 修（編著）. 1980. 『資料体系——アジア・アフリカ国際関係政治社会史 第七巻 憲法資料
（アジアⅠ）』東京：パピルス出版.
臼井 桂. 1990. 「バングラデシュ・ナショナリズムの源流——ベンガル語国語化運動を中心として」『バ
ングラデシュ——低開発の政治構造』（研究双書393）佐藤 宏（編）所収. 東京：アジア経済研究所.

4. 新聞雑誌類

Nation (Rangoon), Jan. 7 1957, July 15, 1957
Guardian Monthly (Rangoon) Sep., Oct. and Nov. 1954, May, Aug. and Oct. 1960, Mar. 1965